

『古今集』賀の部から物名の部までの構造

——左右対称の対応関係という観点からの分析——

平 沢 竜 介

まず、『古今集』冬の部の巻軸歌³⁴²と賀の部の巻頭歌から八首目までを示してみよう。^{註1}

「歌奉れ」とおほせられし時に、よみて奉れる

紀貫之

342 行く年の惜しくもあるかな真澄鏡見る影さへにくれぬと

思へば

題しらず

読人しらず

343 わが君は千代に八千代に細れ石の巖と成りて苔のむすま
で

344 わたつ海の浜の真砂を数へつつ君が千年のありかずにせ

む

345 しほの山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をば八千代とぞ

鳴く

346 わが齡君が八千代にとりそへてとどめおきては思ひいで
にせよ

仁和の御時、僧正遍照に七十の賀たまひける時の御
歌

347 かくしつつともかくにもながらへて君が八千代にあふ

よしもがな

仁和の帝の親王におはしましける時に、御をばの八
十の賀に、銀を杖につくれりけるを見て、かの御を
ばにかはりてよみける

僧正遍照

348 ちはやぶる神やきりけむつくからに千年の坂も越えぬべ

らなり

堀川大臣の四十の賀、九条の家にてしける時によめ
る

在原業平

349 桜花散りかひくもれ老いらくの来むといふなる道まがふ
がに

貞辰親王のをばの四十の賀を大堰にてしける日よめ
る

紀惟岳

350 龜の尾の山の岩根をとめて落つる滝の白玉千代のかずか
も

342が「見る影さへにくれぬと思へば」と鏡に映る我が姿から老
いを感じるのに対し、349は「老いらくの来むといふなる道まが
ふがに」と老いが来るのを阻もうとする姿勢を示して対応し、

343は「細れ石の巖と成りて」、350は「亀の尾の山の岩根」と詠じて、「巖」と「岩根」が対応する。344の「君が千年のありかずにせむ」と348の「千年の坂も越えぬべらなり」は、ともに「千年」を詠じて対をなし、345の「君が御代をば八千代とぞ鳴く」、346の「わが齡君が八千代にとりそへて」、347の「君が八千代にあふよしもがな」は、いずれも、「八千代」の語を詠み込んで対応する。

342から350までの歌群は、342と349の対と343と350の対が交差して対応しつつ、346を中心に図1のように左右対称の構造を形成する。

349から356までの歌群を示すと以下のようになる。

堀川大臣の四十の賀、九条の家にてしける時によめ
る
在原業平

349 桜花散りかひくもれ老いらくの来むといふなる道まがふ
がに
貞辰親王のをばの四十の賀を大堰にてしける日よめ



図 1

る
紀惟岳
350 亀の尾の山の岩根をとめて落つる滝の白玉千代のかずか
も

貞保親王の、後の宮の五十の賀奉りける御屏風に、
桜の花の散るしたに、人の花見たる形かけるをよめ
る
藤原興風

351 いたづらに過ぐす月日はおもほへて花見て暮らす春ぞす
くなき

本康親王の七十の賀のうしろの屏風によみてかきけ
る
紀貫之

352 春くれば屋戸にまづ咲く梅の花君が千年のかざしとぞ見
る

素性法師

353 いにしへにありきあらずは知らねども千年のためし君に
はじめむ

354 臥して思ひ起きてかぞふる万世は神ぞ知るらむわが君の
ため

藤原三善の六十の賀によみける
在原滋春

355 鶴亀も千年ののちは知らなくに飽かぬ心にまかせはてて
む

この歌は、ある人、在原時春がともいふ

良岑経也が四十の賀に、女にかはりてよみ侍りける

素性法師

356 万世を松にぞ君をいはひつる千年のかげに住まむと思へ
ば

349から356までの歌群は、349が「桜花」を詠ずるのに対し、356は「松」を詠じて対応し、350が「亀の尾の山」、355が「鶴亀」を詠じて対をなす。351の「いたづらに過ぐす月日」と354の「臥して思ひ起きてかぞふる万世」という表現は、いずれも年月の過ぎていく様を詠じて対をなし、352の「君が千年のかざしとぞ見る」と353の「千年のためし君にはじめむ」という表現も「千年」の語を詠じて対をなす。

349から356までの歌群は、図2のように352と353の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を構成する。

356から賀の巻に続く離別の部の巻頭歌365までを示すと、次のようになる。

良岑経也が四十の賀に、女にかはりてよみ侍りける

素性法師

356万世を松にぞ君をいはひつる千年のかけに住まむと思へば

尚侍の、右大将藤原朝臣の四十の賀しける時に、四季の絵かけるうしろの屏風にかきつけたりける歌



図2

(素性法師)

357春日野に若菜摘みつつ万世をいはふ心は神ぞ知るらむ

(みつね)

358山高み雲居に見ゆる桜花心のゆきて折らぬ日ぞなき

(とものり)

359めづらしき声ならなくに郭公ここの年の飽かずもある

かな

秋

(みつね)

360住の江の松を秋風吹くからに声うちそふる沖つ白波

(ただみね)

361千鳥鳴く佐保の河霧立ちぬらし山の木の葉も色まさりゆく

く

(これのり)

362秋くれど色もかはらぬ常磐山よその紅葉を風ぞかしける

冬

(つらゆき)

363白雪の降りしく時はみよしのの山下風に花ぞ散りける

春宮の生まれたまへりける時にまゐりてよめる

典侍藤原因香朝臣

臣

364峰高き春日の山にいづる日はくもる時なく照らすべらなり

り

題しらず

在原行平朝臣

365立ち別れいなばの山の峰におふる待つとし聞かばいま帰

り来む

356から365までの歌群は、356と365がともに「松」を詠じて共通し、

357は「春日野」、364は「春日の山」を詠じて対をなし、358が「山」「桜花」を詠ずるのに対し、363は「山下風」「花」を詠じて対応する。359の「郭公ここの年の飽かずもあるかな」という表現と362の「秋くれど色もかはらぬ常磐山」という表現は、毎年毎年変わることはない有様を描いて対をなし、360は「住の江の松」に秋風が吹くと「沖つ白波」が声を添える、361は「佐保の河霧」が立つと「山の木の色も色まさりゆく」と、いずれも秋になって変化する情景を詠じて対をなす。また、359が「郭公」、361が「千鳥」を詠じて対応し、360が「秋風」、362が「風」を詠じて対をなす。

356から365までの歌群は、360と361の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を有するとともに、359と361、360と362が対応関係を持つという左右対称の対応構造を形成する。これを図示すると、**図3**になる。

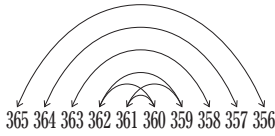


図3

『古今集』賀の部は、冬の部の巻軸歌342から350までの歌群、

349から356までの歌群、356から離別の部の巻頭歌365までの歌群という三つの左右対称の対応構造を持つ歌群が連続して配置され、『古今集』の巻頭歌と連続性を持つ342が349、349が356、356が365と対応することによって、『古今集』の巻頭歌は離別の部の巻頭歌と連続性を持つことになる。

*

離別の部の構造の分析に移ろう。まず、離別の部の巻頭歌365から370までの歌群を示してみると以下のようなになる。

題しらず

在原行平朝臣

365 立ち別れいなばの山の峰におふる待つとし聞かばいま帰り来む

読人しらず

366 すがる鳴く秋の萩原朝立ちて旅ゆく人をいつとか待たむ

367 限りなき雲居のよそに別るとも人を心におくらさむや

小野千古が陸奥介にまかりける時に、母のよめる

368 たらちねの親のまもりとあひそふる心ばかりはせきなどめそ

貞辰親王の家にて、藤原清生が近江介にまかりける時に、うまのはなむけしける夜、よめる

紀利貞

紀利貞

369 今日別れ明日はあふみと思へども夜やふけぬらむ袖の露

けき

越へまかりける人によみてつかはしける

370 かへる山ありとは聞けど春霞立ち別れなば恋しかるべし

365から370までの歌群は、365が「いなばの山」、370が「かへる山」を詠じて対をなすとともに、365が「待つとし聞かば」、370が「立ち別れなば」といづれも順接仮定条件の構文を取って対応する。366が「朝立ちて旅ゆく人をいつとか待たむ」と朝の別れを詠ずるのに対し、369は「夜やふけぬらむ袖の露けき」と夜の別れを詠じて対をなし、367は「人を心におくらさむやは」、368は「心ばかりはせきなどどめそ」と、ともに「心」の語を詠み込んで対応する。

365から370までの歌群は、367、368の対を中心に同心円状に左右対称の対応構造を形成する。それを図示すると、図4となる。

続いて、370から382までの歌群を示してみよう。

越へまかりける人によみてつかはしける

(紀利貞)

370かへる山ありとは聞けど春霞立ち別れなば恋しかるべし

人のうまのはなむけにてよめる 紀貫之

371惜しむから恋しきものを白雲の立ちなむのちは何心地せ

む

友だちの、人の国へまかりけるによめる



図4

在原滋春

372別れてはほどをへだつと思へばやかつ見ながらにかねて

恋しき

東の方へまかりける人によみてつかはしける

伊香子淳行

373思へども身をしわけねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞ

やる

逢坂にて人を別れる時よめる 難波万雄

374逢坂の関しまさしきものならば飽かず別るる君をとどめ

よ

題しらず 読人しらず

375唐衣たつ日はきかじ朝露の置きてしゆけば消ぬべきものを

を

この歌は、ある人司を賜りて、新しき妻につきて、

年経て住みける人を捨てて、ただ、「明日なむ立つ」とばかり言へりける時に、ともかうも言はで、

よみてつかはしける

常陸へまかりける時に、藤原公利によみてつかはし

ける

寵

376あさなけに見べき君とし頼まねば思ひたちちる草枕なり

紀のむねさだが東へまかりける時に、人の家に宿り

て、暁いでたつとて、まかり申ししければ、女のよ

みていだせりける

読人しらず

377 えぞ知らぬいま心見よ命あらば我や忘るる人や訪はぬと
あひ知りて侍りける人の、東の方へまかりけるを送
るとよめる

ふかやぶ

378 雲居にもかよふ心のおくれねば別ると人に見ゆばかりな
り

友の東へまかりける時によめる 良岑秀宗

379 白雲のこなたかなたに立ち別れ心を暫とくだく旅かな

陸奥国へまかりける人によみてつかはしける

つらゆき

380 白雲の八重にかさなるをちにも思はむ人に心へだつな
人の別れける時によみける

381 別れてふことは色にもあらなくに心にしみてわびしかる
らむ

あひ知れりける人の越国にまかりて、年経て京にま
うできて、又帰りける時によめる 凡河内躬恒

382 かへる山なにはぞはありてあるかひは来てもとまらぬ名に
こそありけれ

370 と382は、いずれも越の国に赴く人に遣わした歌で、ともに
「かへる山」を詠じて対応する。371は「白雲」を詠じて378の
「雲居」、379、380の「白雲」と対応すると同時に、「何心地」と
詠じて、378、379、380、381がいずれも「心」の語を詠ずるのと対
応する。372は「別れ」という動詞を詠み込み、378の「別る」、
379の「立ち別れ」、381の「別れてふ」という表現と対応すると
ともに、「へだつ」という語を用いて380の「へだつな」と対応

する。373は「心」の語を詠み込んで、378、379、380、381が何れも
「心」の語を詠ずるのと対応する。374は「別るる」という語が
378の「別る」、379の「立ち別れ」、381の「別れてふ」といった表
現と対応し、「君をとどめよ」という表現と380の「心へだつな」
という表現が共に命令表現を取って対応する。すなわち、371か
ら374までの歌群のそれぞれの歌は、378から381までの歌群のそれ
ぞれの歌と対応関係を有している。

また、374は「逢坂の関しまさしきものならば」、377は「命あ
らば」と、いずれも順接仮定条件の構文を用いて共通し、375は
「朝露の置きてしゆけば」、378は「雲居にもかよふ心のおくれね
ば」と、ともに順接確定条件の構文を取って対応する。370から
374、378から382までの歌が、何れも男性の歌であったのに対し、
375、376、377はともに旅に出る男を見送る女の歌という点で共通
する。

370から382までの歌群は、375、376、378がそれぞれ相互に対応す
るとともに、376を中心に370と382、375と377が同心円状に、374と377
と378は交差して対応し、かつ371から374までの歌群に収められ
たそれぞれの歌と、378から381までの歌群に収められたそれぞれ
の歌が全て対応することで、376を中心に左右対称の対応関係を
形成している。これを図示すると、図5となる。

続いて382から391までの歌群を挙げてみよう。

あひ知れりける人の越国にまかりて、年経て京にま
うできて、又帰りける時によめる 凡河内躬恒

382 かへる山なにはぞはありてあるかひは来てもとまらぬ名に
こそありけれ

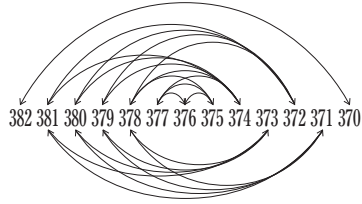


図 5

越国へまかりける人によみてつかはしける
 383 よそののみ恋ひやわたらむ白山の雪見るべくもあらぬわ
 が身は

音羽の山のほとりにて人を別るとてよめる

つらゆき

384 音羽山木高く鳴きて郭公君が別れを惜しむべらなり

藤原後蔭が唐物の使ひに、長月の晦日がたにまかり
 けるに、うへのをのことも酒たうびけるついでによ
 める

藤原兼茂

385 もろともに鳴きてとどめよきりぎりす秋の別れは惜しく
 やはあらぬ

平元規

386 秋霧のともに立ちいでて別れなばはれぬ思ひに恋ひやわ

たらむ

源実が筑紫へ湯浴みむとてまかりける時、山崎にて
 別れ惜しみける所にてよめる しろめ

387 命だに心にかなふものならばなにか別れの悲しからまし
 山崎より神奈備の森まで、送りに人々まかりて、帰
 りがてにして別れ惜しみけるによめる

源実

388 人やりの道ならなくにおほかたはいき憂しといひていざ
 帰りなむ

「今はこれより帰りね」と実が言ひける折によみけ
 る

藤原兼茂

389 したはれて来にし心の身にしあれば帰るさまには道も知
 られず

藤原のこれをかが武藏介にまかりける時に、送りに
 逢坂を越ゆとてよみける

つらゆき

390 かつ越えて別れもゆくか逢坂は来てもとまらぬ名にこそ
 ありけれ

大江千古が越へまかりけるうまのはなむけによめる

藤原兼輔朝臣

391 君がゆく越の白山知らねども雪のまにまにあとは尋ねむ
 382 と 390 は、いずれも「来てもとまらぬ名にこそありけれ」とい
 う表現を用いて対応し、383 と 391 は、ともに「白山」「雪」を詠
 じて共通する。384 と 385 は「郭公君が別れを惜しむべらなり」、

「きりぎりす秋の別れは惜しくやはあらぬ」と類似した表現を用いて対応し、385と386はともに「藤原後蔭が唐物の使ひ」に赴く際に詠まれた歌という点で共通し、385が「もろともに鳴きてとどめよきりぎりす」、386は「秋霧のともに立ちいでて別れなば」といづれも秋の景物を詠み込みながら別れを惜しむ気持ちを持てて対応する。また、384から386はいづれも季節を感じさせ「郭公」「きりぎりす」「秋霧」といった景物が詠み込まれている点で共通し、三首それぞれが相互に対応する。

386は「秋霧のともに立ちいでて別れなば」、387は「命だに心になふものならば」といづれも順接仮定条件の構文を用いて対をなす。387から389は筑紫に旅立つ源実とそれを見送りに来た人々の贈答歌で、それ以前の三首384から386までが季節の景物を詠じていたのに対し、季節を感じさせる表現がないという点で、384から386までの歌群とは別の一塊の歌群と見ることができよう。この三首は、387は「命だに心になふものならば」、388は「人やりの道ならなくに」、389は「したはれて来にし心の身にすれば」と何らかの条件を示す表現を上三句に配置するという点でも共通する。387から389は、歌の詠まれた順序に従って配列されているが、源実の旅立ちに纏わる贈答歌という点で三首それぞれが相互に対応する。

382から391までの歌群は、382と390の対と383と391の対が交差して対応し、384から386までの歌群と387から389までの歌群が、それぞれ三首ずつ相互に対応し、384から386までの歌群の末尾に位置する386と387から389までの歌群の冒頭に位置する387が対応関係を持つという形で、386と387の対を中心に左右対称の構造を形作る。



図6

これを図示すると、図6になる。

390から離別の部の巻軸歌405までの歌群は、次のようになる。

藤原のこれがかが武藏介にまかりける時に、送りに逢坂を越ゆとてよみける

つらゆき

390 かつ越えて別れもゆくか逢坂は来てもとまらぬ名にこそ
ありけれ

大江千古が越へまかりけるうまのはなむけによめる
藤原兼輔朝臣

391 君がゆく越の白山知らねども雪のまにまにあとは尋ねむ
人の花山にまうできて、夕さりつかた、帰りなむと
しける時によめる

僧正遍照

392 夕ぐれの籬は山と見えなむ夜は越えじと宿りとるべく
山にのぼりて、帰りまうできて、人々別れけるつい

でによめる

幽仙法師

393 別れをばやまの桜にまかせてむとめむとめじは花のまに
まに

雲林院の親王の舍利会に山にのぼりて帰りけるに、
桜の花のもとにてよめる

僧正遍照

394 山風に桜吹きまき乱れなむ花のまぎれにたちとまるべく

幽仙法師

395 ことならば君とまるべくにははなむ帰すは花の憂きにや
はあらぬ

仁和の帝、親王におはしましける時に、布留の滝御
覧じにおはしまして、帰り給ひけるによめる

兼芸法師

396 飽かずして別るる涙滝にそふ水まさるとやしもは見るら
む

かんなりの壺に召したりける日、大御酒などたうべ
て、雨のいたく降りければ、夕さりまで侍りてまか
りいでける折に、盃をとりて

つらゆき

397 秋萩の花をば雨に濡らせども君をばましてをしとこそ思
へ

とよめりける返し

兼覧王

398 をしむらむ人の心を知らぬまに秋の時雨と身ぞふりにけ
る

兼覧王にはじめて物語して別れける時によめる

みつね

399 別るれどうれしくもあるかこよひよりあひ見ぬさきにな
にを恋ひまし

題しらず

読人しらず

400 飽かずして別るる袖の白玉は君が形見とつつみてぞゆく
401 限りなく思ふ涙にそほちぬる袖はかはかじ逢はむ日まで

に

402 かきくらしことは降らなむ春雨に濡れ衣着せて君をとど
めむ

403 しひてゆく人をとどめむ桜花いづれを道とまどふまで散
れ

志賀の山越えにて、石井のもとにてもいひける人
の別れける折によめる

つらゆき

404 結ぶ手のしづくににごる山の井のあかでも人に別れぬる
かな

道にあへりける人の車にものを言ひつきて、別れけ
る所にてよめる

とものり

405 下の帯の道はかたがた別るともゆきめぐりても逢はむと
ぞ思ふ

390 から405までの歌群は、390が「逢ふ」を連想させる逢坂を詠ず
るのに対し、405は別れてもまた逢おうと、ともに「逢ふ」こと
を詠み込んで対をなし、391が「越の白山知らねども」、404が

「結ぶ手のしづくににぐる山の井の」と、ともに序詞を用いて対応する。392は「夜は越えじ」と詠じて、401の「袖はかはかじ」という表現と「じ」という打ち消しの意志、推量の助動詞を共有して対をなし、393は「別れをばやまの桜にまかせてむ」、402は「春雨に濡れ衣着せて君をとどめむ」と別れをとどめることを桜や雨に託している点で共通し、意志を表す助動詞「む」を用いている点でも対をなす。394と403はともに桜の花が散り乱れて帰る道に分からなくさせ、帰る人を留めて欲しいと詠じて対応し、395が「帰すは花の憂きにやはあらぬ」と詠ずるのに対して、399は「別るれどうれしくもあるか」と対照的な内容を詠じて対をなす。396は「飽かずして別るる涙」、400は「飽かずして別るる袖の」と一、二句が類似した表現を有して対をなし、397と398は贈答歌であることから一對と見做すことができる。390から405までの歌群は、390と405、391と404、393と402が、397と398の対を中心同心円状に対応し、かつ392と400の対、394と403の対、395と399の対、396と400の対も交差して対応して、**図7**のように397と398の対を中心左右対称の対応関係を形成する。

離別の部は、左右対称の対応構造を持つ四つの歌群、すなわち離別の部の巻頭歌365から370までの歌群、370から382までの歌群、382から391までの歌群、390から離別の部の巻頭歌405までの歌群が連続して配置されている。『古今集』の巻頭歌と対応する365は370と対応し、370は382、382は390、390は離別の部の巻頭歌405と対応するという形で、離別の部の巻頭歌は、『古今集』1番歌と連続した関係を持つことになる。

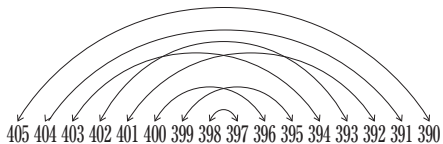


図7

鞆旅の部の構造の分析に移ろう。離別の部の巻頭歌405、それに続く鞆旅の部の巻頭歌406から415までの歌群を提示すると以下のようになる。

道にあへりける人の車にもを言ひつきて、別れる所にてよめる

とものり

405下の帯の道はかたがた別るともゆきめぐりても逢はむと

ぞ思ふ

唐土にて月を見てよみける

阿倍仲麿

406 天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも

この歌は、「昔、仲麿を唐土に物ならはしに遣はしたりけるに、あまたの年を経て、え帰りまうで来ざりけるを、この国より又使ひまかりいたりけるに、たぐひてまうできなむとていでたちけるに、明州といふ所の海辺にて、かの国の人うまのはなむけしけり。夜になりて、月のいとおもしろくさしいでたりけるを見てよめる」となむ語り伝ふる隠岐国に流されける時に、船に乗りて出で立つとて、京なる人のもとにつかはしける 小野篁朝臣

407 わたの原八十島かけて漕ぎいでぬと人には告げよ海人の

釣舟

題しらず

読人しらず

408 都出でて今日みかの原泉河川風さむし衣かせ山

409 ほのほとあかしの浦の朝霧に鳥隠れゆく舟をしぞ思ふ

この歌は、ある人いはく、柿本人麿が歌なり

東の方へ、友とする人ひとりふたりいぎなひていきけり。三河国八橋といふ所にいたれりけるに、その川のほとりに、杜若いとおもしろく咲けりけるを見て、木のかげにおりゐて、「かきつばた」といふ五文字を句のかしらにすゑて、旅の心をよまむとてよめる 在原業平朝臣

410 唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をし

ぞ思ふ

武蔵国と下総国との中にある、隅田河のほとりにい

たりて、都のいと恋しうおほえければ、しばし川のほとりにおりゐて、「思ひやれば、かぎりなく遠くも来にけるかな」と思ひわびてながめをるに、渡守、「はや舟に乗れ。日暮れぬ」と言ひければ、舟に乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なくしもあらず、さる折に、白き鳥の嘴と足と赤き、川のほとりに遊びけり。京には見えぬ鳥なりければ、みな人見知らず。渡守に「これは何鳥ぞ」と問ひければ、「これなむ都鳥」と言ひけるを聞きてよめる

411 名にしおはばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなし

やと

題しらず

読人しらず

412 北へ行く雁ぞ鳴くなるつれてこし数はたらでぞ帰るべら

なる

この歌は、ある人「男女もろともに人の国へまかりけり。男まかりいたりて、すなはち身まかりにければ、女ひとり京へ帰りける道に、帰る雁の鳴きけるを聞きてよめる」となむいふ

東の方より京へまうでくとて、道にてよめる

おと

413 山かくす春の霞ぞうらめしきいづれ都のさかひなるらむ

越国へまかりける時、白山を見てよめる

みつね

414 消えはつる時しなれば越路なる白山の名は雪にぞあり

ける

東へまかりける時、道にてよめる つらゆき

415系による物ならなくに別れ路の心細くもおもほゆるかな
405は「下の帯」、410は「唐衣」、415は「糸」というように、いずれも衣服に関する語が歌の冒頭に据えられている点で共通し、三首の歌はそれぞれ他の二首の歌と対応するという関係を形成する。406は「春日なる三笠の山にいでし月」、409は「あかしの浦の朝霧に鳥隠れゆく舟」というように、ともにある場所のある景物を詠じて対をなし、407と408はいずれも旅の途中で目にした「海人の釣舟」や「鹿背山」に「人には告げよ」、「衣かせ」と命令している点で対応する。411と414は「名」の語を詠み込ん

甲斐国へまかりける時、道にてよめる みつ

で共通し、412と413はいずれも都に帰る様を詠じて共通する。
また、406は「春日なる三笠の山にいでし月」、412は「北へ行く雁」というようにともに天空ある事象を詠じ、407が「八十島かけて漕ぎいでぬと人には告げよ」と海人の釣舟に命ずるの

416夜を寒み置く初霜をはらひつつ草の枕にあまたたび寝ぬ
但馬国の湯へまかりける時、ふたみの浦といふ所にとまりて、夕さりの乾飯食べけるに、ともにありける人々の歌よみけるついでによめる

藤原兼輔

対し、411は「わが思ふ人はありやなしや」と都鳥に尋ねて対をなす。408が「鹿背山」を詠ずるのに対し、414は「白山」を詠じて対応し、409が「鳥隠れゆく舟」を隠す「朝霧」、413が「山」を隠す「春の霞」を詠じて対をなす。

405から415までの歌群は、410を中心に錯綜した対応関係を有しつつ、**図8**のような左右対称の対応関係を形成する。

415から物名の部の巻頭歌422までの歌群を示すと、以下のようになる。

東へまかりける時、道にてよめる つらゆき

415系による物ならなくに別れ路の心細くもおもほゆるかな

けり

418狩り暮らしたなばたつめに宿からむ天の河原に我は来に

在原業平朝臣

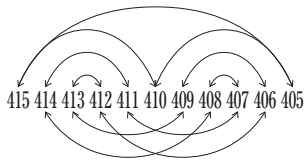


図 8

親王、この歌をかへすがへすよみつ返しえせずな
りにければ、供に侍りてよめる 紀有常

419ひととせにひとたび来ます君待てば宿かす人もあらじと
ぞ思ふ

朱雀院の奈良におはしましたりける時に、手向山に
てよみける

420このたびは幣もとりあえずたむけ山紅葉の錦神のまにま
に
すがはらの朝臣
素性法師

421たむけにはつづりの袖も切るべきに紅葉に飽ける神やか
へさむ

うぐひす
藤原敏行朝臣
422心から花のしづくにそほちつつ憂くひずとのみ鳥の鳴く
らむ

415が「心細くもおもほゆるかな」、422は「心から花のしづくに
そほちつつ」といずれも「心」の語を詠み込んで対応する。417
は「蓋身」と掛詞となる「ふたみの浦」、420は「手向け」と掛
詞になる「たむけ山」を詠じて対をなし、418と419は贈答歌で、
418の「宿」「我」と419の「宿」「君」の語が対応する。

また、415が「糸」、421は「つづりの袖」とともに衣服に関す
る語を詠み込んで対をなし、416は置く初霜を払うのに対し、422
は花の雫に濡れるというように対照的な状況を詠じながら、と
もに「つつ」という接続助詞を用いた表現を取って対をなす。
さらに、416は「夜を寒み」、417は「夕月夜おほつかなきを」と

いずれも旅の夜の状況を詠じて対をなし、420と421も、「朱雀院
の奈良におはしましたりける時に、手向山にてよみける」とい
う状況で詠まれた歌という点で共通し、かつ紅葉を幣と見立て
る技法も共通する。

415から422までの歌群は、418と419の対を中心に417と420、415と422
が同心円状に対応すると同時に、415と421、416と422が交差して対
応し、416と417、420と421がそれぞれ対応して、**図9**に示すように、
418と419の対を中心に左右対称の対応関係を構成する。

羈旅の部は、離別の部巻軸歌の405から羈旅の部415までの歌群
と、415から物名の部巻軸歌422までの歌群が左右対称の構造を示
すというように、左右対称の対応関係を持つ二つの連続した歌
群によって構成されている。『古今集』の巻頭歌と連続性を持
つ離別の部の巻軸歌405は415と対応し、415は物名の部の巻軸歌422
と対応して、『古今集』の巻頭歌はここでも巻の巻軸歌、巻頭
歌と対応関係を持つことになる。



図9

*

続いて物名の部の巻頭歌423から436までの歌群を示してみよう。

うぐひす 藤原敏行朝臣

422 心から花のしづくにそほちつつ憂くひずとのみ鳥の鳴く
らむ

ほととぎす

423 来べきほど時すぎぬれや待ちわびて鳴くなる声の人をと
よむる

うつせみ

424 波のうつ瀬見れば玉ぞ乱れける拾はば袖にはかなからむ
や

返し

壬生忠岑

425 袂よりはなれて玉を包まめやこれなむそれと移せ見むか
し

うめ

読人しらす

426 あな憂目につねなるべくも見えぬかな恋しかるべき香は
にほひつつ

かにはざくら

つらゆき

427 かづけども波のなかにはさぐられで風吹くごとに浮き沈
む玉

すもの花

428 いま幾日春しなければうぐひすものはながめて思ふべ
らなり

からももの花

ふかやぶ

429 逢ふからもものはなほこそ悲しけれ別れむことをかねて
思へば

たちばな

小野滋蔭

430 あしひきの山たちはなれゆく雲の宿りさだめ世にこそ
ありけれ

をがたまの木

ともりのり

431 みよしの吉野の滝に浮かびいづる泡をか玉の消ゆと見
つらむ

やまがきの木

読人しらす

432 秋は来ぬ今やまがきのきりぎりす夜な夜な鳴かむ風の寒
さに

あふひ かつら

433 かくばかり逢ふ日のまれになる人をいかがつらしと思は
ざるべき

434 人目ゆゑのちに逢ふ日のはるけくはわがつらきにや思ひ
なされむ

くたに

僧正遍照

435 散りぬればのちはあくたになる花を思ひ知らずも迷ふて
ふかな

さうび

つらゆき

436 我は今朝うひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべか
りけり

422は「うぐひす」、423は「ほととぎす」と、ともに物名として
春と夏の鳥を詠み込んで対をなし、435は「くたに」436は「さう
び」と、いずれも物名として夏の花、しかも漢語の花の名を詠

み込んで対をなす。と同時に422が「心から花のしづくにそほちつつ」、「憂くひず」と鳴く鳥を詠ずるのの対し、435は「散りぬればのちはあくたになる花を思ひ知らずも迷ふてふ」と蝶を詠ずるといように対照的な様子の鳥と蝶を詠じて対をなし、423は「來べきほど時すぎ」て例年のように鳴く郭公を詠ずるのの対し、436は「今朝うひにぞ見つる花の色」、つまり今朝初めて見た花を詠じて対をなす。424と425はいずれも物名として「うつせみ」を詠み込んで共通し、433と434はいずれも物名に「あふひ」「かつら」を詠み込んで対をなすとともに、いずれも贈答歌の趣を呈して対応する。424が贈歌で425が返歌であることは詞書より明らかであり、433と434は、歌の詠みぶりから433が贈歌で434が答歌と思われる。とすると、贈歌と見做される424と433が対をなし、答歌と目される425と434が対応するということになる。

また、426から432までの歌群は、426と430がともに無常を詠じて対応し、427と431はいずれも「玉」を詠じて対をなし、428と432は鳴かない鶯と鳴くきりぎりすを詠じて対応する。

以上の検討から、422から436までの歌群は、429を中心に図10のような左右対称の対応関係を構成する。

すなわち、422から436までの歌群は、426から432までの歌群が429を中心に426と430、427と431、428と432が対応して左右対称の構造をなす。422から425までの歌群は、422と423、424と425がそれぞれ対をなし、433から436までの歌群は、433と434、435と436がそれぞれ対をなしつつ、422と435、423と436、424と433、425と434が対応するという形を取り、429を中心に左右対称の対応関係を構築する。

続いて、435から445までの歌群を見てみよう。

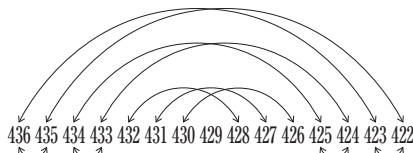


図 10

くたに

僧正遍照

435 散りぬればのちはあくたになる花を思ひ知らずも迷ふて

ふかな

さうび つらゆき

436 我は今朝うひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべか

りけり

をみなへし

437 白露を玉にぬくとやささがにの花にも葉にも糸をみなへ

し

438 朝露をわけそほちつつ花見むと今ぞ野山をみなへしりぬ

る

朱雀院の女郎花合の時に、「をみなへし」といふ五

文字を句のかしらにおきてよめる つらゆき

439 小倉山峰たちならし鳴く鹿の経にけむ秋を知る人ぞなき

きちかうのはな ともりの

440 秋ちかう野はなりにけり白露の置ける草葉も色かはりゆ
く
しをに 読人しらず

441 ふりはへていざ故里の花見むと来しをにはほぞ移るひに
ける ともものり

りうたむのはな

442 わが屋戸の花踏みちらす鳥打たむ野はなければやここに
しも来る をばな 読人しらず

をばな

443 ありと見て頼むぞかたきうつせみの世をばなしとや思ひ
なしてむ けにこし 矢田部名実

444 うちつけに濃しとや花の色を見む置く白露の染むるばか
りを 二条の後、春宮の御息所と申しける時に、めどに削

り花させりけるをよませたまひける文屋康秀

445 花の木にあらざらめども咲きにけりふりにし木の実なる
時もがな

435 は花が散れば「あくた」となると詠ずるのに対し、445 は「花
の木」でないのに花が咲いたと対照的な事柄を詠じて対をなす。

436 は「花の色をあだなる物といふべかりけり」と花の色のはか
なさを詠ずるが、444 も「濃しとや花の色を見む置く白露の染む

るばかりを」と花の色は露が染めただけのはかないものと詠じ
対をなし、437 が「ささがに」を詠み込むのに対し、443 は「うつ
せみ」を詠み込むというように、ともに虫を詠み込んで対応す
る。438 は「今ぞ野山をみなへしりぬる」、442 は「野はなければ
やここにしも来る」と、いずれも「野」を詠み込んで共通し、
439 は「小倉山」に鳴く鹿が幾年鳴き通したか知る人がいない、
441 は「故里の花」を見に来たのに、花が咲いていないと、いず
れも人や物の不在を詠じて共通する。

また、436 は「花の色をあだなる物といふべかりけり」、443 は
「うつせみの世をばなしとや思ひなしてむ」と、ともに無常を
詠じて対をなし、437 と444 はいずれも「白露」「花」の語を詠み
込んで対応する。438 は「朝露をわけそほちつつ花見むと」、441
は「ふりはへていざ故里の花見むと」と類似した表現を用いて
対応し、439 が「小倉山峰たちならし鳴く鹿」を詠ずるののに対し、
442 は「わが屋戸の花踏みちらす鳥」を詠じて対をなす。

さらに、435 が「散りぬればのちはあくたになる花を」、440 が
「白露の置ける草葉も色かはりゆく」といずれも移ろいゆく植
物を詠じて対をなし、440 が「秋ちかう野はなりにけり」、445 が
「花の木にあらざらめども咲きにけり」と類似した表現を用い
て対応する。

435 から445 までの歌群は、440 を中心に同心円状に対応関係を築
くとともに、436 と443、437 と444、438 と441、439 と442 の対が交差し、
かつ435、440、445 が相互に対応して、440 を中心に左右対称の対応
関係を構築する。その関係を図示すると、図11となる。

次に439 から445 までの歌群を示してみよう。

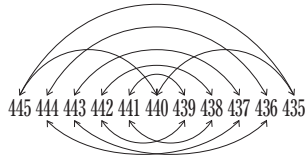


図 11

朱雀院の女郎花合の時に、「をみなへし」といふ五
文字を句のかしらにおきてよめる つらゆき

439 小倉山峰たちならし鳴く鹿の経にけむ秋を知る人ぞなき

きちかうのはな ともり

440 秋ちかう野はなりにけり白露の置ける草葉も色かはりゆ

く

しをに 読人しらず

441 ふりはへていざ故里の花見むと来しをにほひぞ移るひに

ける

りうたむのはな ともり

442 わが屋戸の花踏みちらす鳥打たむ野はなればやここに

しも来る

をばな 読人しらず

443 ありと見て頼むぞかたきうつせみの世をばなしとや思ひ

なしてむ

けにこし 矢田部名実

444 うちつけに濃しとや花の色を見む置く白露の染むるばかりを

二条の後、春宮の御息所と申しける時に、めどに削り花させりけるをよませたまひける文屋康秀

445 花の木にあらざらめども咲きにけりふりにし木の実なる時もがな

しのぶぐさ 紀利貞

446 山高みつねに嵐の吹く里はにほひもあへず花ぞ散りける

やまし 平篤行

447 郭公峰の雲にやまじりにしありとは聞けど見るよしもなき

からはぎ 読人しらず

448 空蟬の蛻は木ごとにとどむれど魂のゆくへを見ぬぞ悲しき

かはなくさ ふかやぶ

449 うばたまの夢になにかはなくさまむうつつにだにも飽かぬ心を

さがりごけ 高向利春

450 花の色はただひとさかり濃けれどもかへすがへすぞ露は染めける

439 が「小倉山に鳴く鹿が幾年鳴いているのか知る人もいない」と詠ずるのに対し、444 は「けにこし」という名の通り色の濃い花と見ることができようか、花に置いた白露が時間をかけて染めたものなの」と詠じ、いずれも眼前の現象の背後に時の経

過を想像している点で共通する。440と445は先に述べたように類似した表現を用いて対をなし、441が「故里の花見むと来しをにほひぞ移ろひにける」と詠ずるのに対し、446は「嵐の吹く里はにほひもあへず花ぞ散りける」といずれも花の散る里の様を詠じて対応する。442は「鳥」、447は「郭公」と、ともに鳥を詠み込んで共通し、443と448は「うつせみ」の語を共有する。444と449は、444が「うちつけに濃しとや花の色を見む」、449が「うばたまの夢になにかはなぐさまむ」と、どちらも反語表現を取って対をなし、445の「花の木にあらざらめども」と450の「花の色はただひとさかり濃けれども」はいずれも逆接確定条件の構文を取って対をなす。

439から450までの歌群は図12に示すように、それぞれの歌が五首先の歌と対応することによって、444と445を中間点を中心に左右対称の対応関係を形成する。



図 12

444から454までの歌群を示して見よう。

けにごし

矢田部名実

444 うちつけに濃しとや花の色を見む置く白露の染むるばかりを

二条の後、春宮の御息所と申しける時に、めどに削り花させりけるをよませたまひける文屋康秀

445 花の木にあらざらめども咲きにけりふりにし木の実なる時もがな

しのぶぐさ

紀利貞

446 山高みつねに嵐の吹く里はにほひもあへず花ぞ散りけるやまし

平篤行

447 郭公峰の雲にやまじりにしありとは聞けど見るよしもなき

からはぎ

読人しらす

448 空蟬の蛻は木ごとにとどむれど魂のゆくへを見ぬぞ悲しき

かはなぐさ

ふかやぶ

449 うばたまの夢になにかはなぐさまむうつつにだにも飽かぬ心を

さがりごけ

高向利春

450 花の色はただひとさかり濃けれどもかへすがへすぞ露は染めける

にがたけ

しげはる

451 命とて露を頼むにかたければものわびしらに鳴く野辺の虫

かはたけ

景式王

452 さ夜ふけてなかばたけゆく久方の月吹きかへせ秋の山風

わらび

真静法師

453 煙たちもゆとも見えぬ草の葉を誰かわらびと名づけそめ

けむ

ささ まつ びは ばせをば

紀乳母

454 いささめに時待つまにぞ日は経ぬる心ばせをば人に見え

つつ

444 が「ちよつと見ただけで花の色が濃いと見るわけにはいかない」と詠ずるのに対し、454 は「自分の気持を相手にずつと見せている」と詠じて、「にわかに見える」に対し「ずつと見せる」と対照的な内容を詠じて対をなし、445 が「花の木にあらざらめども咲きにけり」、453 が「煙たちもゆとも見えぬ草の葉」を誰が「わらび」と名付けたのかと、ともに矛盾した事柄を詠じて対応する。446 の「つねに嵐の吹く」という表現と452 の「月吹きかへせ秋の山風」という表現は、ともに「風」を詠み込んで共通し、447 が郭公の鳴き声を詠ずるのに対し、451 は野辺に鳴く虫の声を詠じて対応し、448 と450 はともに逆説の接続助詞を用いて対をなす。

また、445 が「ふりにし木の実なる時もがな」と木に呼びかけるのに対し、452 は「月吹きかへせ秋の山風」と風に呼びかけるというように、自然に向かつて自らの願望を表出している点で共通し、446 が「十分に咲かない花」、453 が「燃えない火」を詠じて対をなす。447 が「ありとは聞けど見るよしもなき」、450 は「ひとさかり濃けれどもかへすがへすぞ露は染めける」と、い

ずれも逆接の接続助詞を用いた構文を取って共通し、448 と451 は448 が「空蟬の蛻は木ごとにとどむれど魂のゆくへを見ぬぞ悲しき」、451 が「命とて露を頼むにかたければ」と、ともに命のほかなさを詠じて対応する。

なお、444 が「うちつけに濃しとや花の色を見む」と反語表現を取るのに対し、449 も「うばたまの夢になにかはなぐさまむ」と反語表現を取って対応し、449 と454 は「心」の語を共有し、444 の「うちつけに濃しとや花の色を見む」と454 の「日は経ぬる心ばせをば人に見えつつ」は対照的な表現となつて対をなす。

444 から454 までの歌群は、449 を中心に同心円状の対応関係をなすとともに、445 と452、446 と453、447 と450、448 と451 の対がそれぞれ交差し、444 と449 と454 が相互に対応して、図13のように449 を中心に左右対称の構成をなす。

以上述べてきた435 から445 までの歌群の対応関係を改めて整理して図示すると、図14 となる。

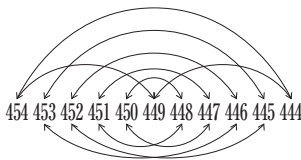


図 13

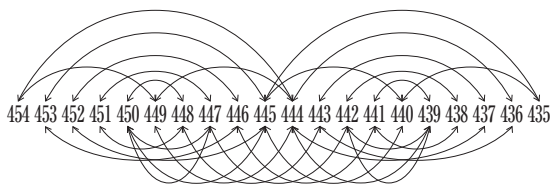


図 14

右の図からも明らかなように、435から454までの歌群は、44と45の中間点を中心に左右対称の対応構造を構築する。

続く454から462までの歌群は以下のようになる。

ささ まつ びは ばせをば 紀乳母

454いささめに時待つまにぞ日は経ぬる心ばせをば人に見え

つつ

なし なつめ くるみ

兵衛

455あじきなし歎きなつめそ憂きことにあひくる身をば捨て

ぬものから

からことといふ所にて春の立ちける日よめる

安倍清行朝臣

456波の音の今朝からことに聞ゆるは春のしらべやあらたま

るらむ

いかがさき 兼覽王

457楫にあたる波のしづくを春なればいかがさきちる花と見

ざらむ

からさき 阿保経覽

458かの方にのいつからさきに渡りけむ波路はあとも残らざ

りけり

伊勢

459波の花沖から咲きて散りくめり水の春とは風やなるらむ

かみやがは

460うばたまのわが黒髪やかはるらむ鏡の影に降れる白雪

よどがは

461あしひきの山辺にをれば白雲のいかにせよとか晴るる時

なき

かたの ただみね

462夏草のうへは繁れる沼水のゆく方のなきわが心かな

464は「心ばせ」、462は「わが心」と、ともに「心」の語を詠み

込んで共通し、455が「憂きことにあひくる身」と詠ずるのに対

し、461は「晴るる時なき」と詠じ、いずれも鬱屈した心情を詠

じて対応する。456は「春のしらべやあらたまるらむ」、460は

「うばたまのわが黒髪やかはるらむ」と、ともにある事柄の変

化を現在推量の助動詞「らむ」を用いて詠じて対応し、457が「楫にあたる波のしづく」を「いかがさきさちる花と見ざらむ」、459が「波の花沖から咲きて散りくめり」といずれも波を花に見立てて詠じ対をなす。また、456、459、460の三首はいずれも現在推量の助動詞の「らむ」を用いて共通し、457は「む」という推量の助動詞、458も過去推量の助動詞「けむ」を用いるというように、456、457、458、459、460の五首が、いずれも推量の助動詞を用いて、相互に対応する。454から462までの歌群は、456から460までの五首が相互に対応しつつ、458を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成する。454から462までの歌群の対応関係を示すと、**図15**となる。

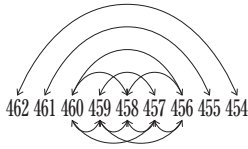


図 15

最後に、462から468までの歌群を示してみよう。

かたの

462 夏草のうへは繁れる沼水のゆく方のなきわが心かな

かつらのみや

源忠

463 秋くれば月の桂の実やはなる光を花と散らすばかりを

ただみね

百和香

464 花ごとに飽かず散らしし風なればいくそばくわが憂しと

かと思ふ

すみながし しげはる

465 春霞なかし通ひ路なかりせば秋くる雁は帰らざらまし

おき火 都良香

466 流れいづる方だに見えぬ涙川沖ひむときや底は知られむ

ちまき 大江千里

467 のちまきのおくれて生ふる苗なれどあだにはならぬたのみとぞ聞く

みとぞ聞く

「は」をはじめ、「る」をはてにて、「ながめ」をかけて時の歌をよめ、と人の言ひければよみける

僧正聖宝

468 花のなか目に飽くやとてわけゆけば心ぞともに散りぬべ

らなる

462と468は「心」の語を共有して対応し、463は「桂の実」、467は「たのみ」に「実」の語を詠み込んで対応する。464は自らの辛い感情を「いくそばくわが憂しとかは思ふ」と表現するのに対応し、466は止めどなく流れる涙のもとなる悲しみは「沖ひむときや底は知られむ」と詠ずるといふように、いずれもその辛さや悲しみの大きさを表現して対をなす。また、462は「沼水のゆく方」、466は「涙川」の「流れいづる方」を詠じて共通し、464と468はいずれも「花」を詠じ、かつ464が「風なれば」、468が「わけゆけば」と、いずれも順接確定条件の構文を取って対応する。462から468までの歌群は、**図16**のように462と466、464と468が



図 16

交差して対応しつつ、465を中心に同心円状に左右対称の対応関係を構成する。

物名の部は、422から436までの歌群、435から454までの歌群、454から462までの歌群、462から468までの歌群の四つの左右対称構造を有する歌群が連続して配置されている。『古今集』においては、各巻がいくつかの連続した左右対称の対応構造によって構成されるが、『古今集』の巻頭歌はそれに続くいずれの巻々においても、巻頭歌ないしは巻軸歌のいずれかと対応してきた。『古今集』の巻頭歌との対応という点から見ると、羈旅の部の最後の左右対称の歌群の最初の歌である415と物名の部の巻頭歌422が対応し、422が436、436が454、454が462、462が物名の部の巻軸歌468と対応するというように、物名の部においても巻頭歌422と巻軸歌468が1番歌と対応していることが見て取れる。

注1 『古今集』の本文は、『新編日本古典文学全集』に拠る。

2 422と423の対は「鶯」や「郭公」という鳥の名を物名と詠み込むばかりでなく、歌自体が鶯や郭公の鳴く様を詠じて対応するが、422が「鶯」が「憂くひず」と鳴くと詠ずるの

に對し、428も「鶯」の鳴く様を「ものなながめて思ふべらなり」と詠じて對をなし、423の「來べきほど時すぎぬれや」と鳴くべき季節に遅れて鳴き始めた郭公を詠ずるのに對し、432は秋の到來とともに鳴き始めるきりぎりすを詠じて対応する。424と425はとも「うつせみ」を物名として詠み込んで對をなすが、424と427は「玉」を詠ずると同時に「波」という語も詠み込んで共通し、425と431は「玉」の語を詠み込むとともに「移せ見むかし」「玉の消ゆと見つらむ」と「見る」の語を共有して対応する。433、434は、いずれも「あふひ」「かつら」を物名として詠み込んで對をなすが、それら二首はいずれも「逢ふ」の語を詠み込む429と対応する。435は「くたに」、436は「さうび」を物名として詠み込み對をなすが、435が「散りぬればのちはあくたになる花」の周りを飛ぶ蝶を「思ひ知らずも迷ふてふかな」と詠ずるのに對し、426は「つねなるべくも見えぬ」梅の花の香りを賞美する人物を描いて対応し、436が「花の色をあだなる物といふべかりけり」と詠ずるのに對し、430が「宿りさだめぬ世にこそありけれ」と、ともに無常を詠じて対応する。この対応関係を図示すると、図17となる。

すなわち、442から425までの歌群および433から436までの歌群の間に存在する426から432までの歌群の配列順は、まず最初に二首ともに二つの同一の物の名を詠み込んだ433、434の二首がいずれも逢うことを詠じていることから、同じく逢うことを詠じて対応する429を426から432の歌群の中心に位置せしめ、次に422に対応する428を429の直前に配置し、423に對

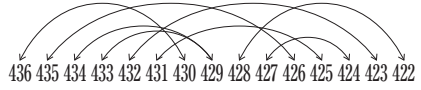


図 17

応する 432 を 433 の直前に配置する。424 と対応する 427 は 428 の直前に配し、425 と対応する 431 は 432 の直前に配す。さらに 435 と対応する 426 を 427 の直前、436 と対応する 430 は 431 の直前に配置する。

つまり、433 と 434 の二つの同一の物の名を詠み込んだ二首と対応する 429 を 426 から 432 までの歌群の中心に位置させて、426 から 432 までの歌群を二分し、422 と 423、424 と 425、435 と 436 という類似した物の名を詠み込む三組の二首一組の歌群の前に位置する歌を 429 の直前から順次 425 に向かって配置し、後に位置する歌を 433 の直前から順次 429 に向かって配置させたと考えられる

(本学教授)